



蜜柑（16）

その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、^{ひやや}漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、も



蜜柑（17）

う安々と^{トンネル}隧道を^{すべ}迂すべりぬけて、
枯草の山と山との間に挟まれた、
或貧しい町はずれの踏切りに通り
かかっていた。踏切りの近くには、
いずれも見すぼらしい^{わら}藁屋根や瓦
屋根がごみごみと狭苦しく建てこ
んで、踏切り番が振るのであろう、
^{いちりゆう}唯一旒のうす白^{ものう}い旗が懶げに暮色
を^{ゆす}揺っていた。やっと隧道を出た
と思う——その時その^{しょうさく}蕭索とした

蜜柑（18）

踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反ら



蜜柑（19）

せて、何とも意味の分らない^{かんせい}喊声
を一生懸命^{ほとばし}に迸らせた。するとそ
の瞬間である。窓から半身を乗り
出していた例の娘が、あの霜焼け
の手をつとのばして、^{いきおい}勢よく左右
に振ったと思うと、^{たちま}忽ち心を躍ら
すばかり暖な日の色に染まってい
る蜜柑が^{およ}凡そ五つ六つ、汽車を見
送った子供たちの上へばらばらと
空から降って来た。私は思わず息



蜜柑（20）

を呑んだ。そうして刹那^{せつな}に一切を
了解した。小娘は、恐らくはこれ
から奉公先へ赴^{おもむ}こうとしている。
小娘は、その懐に蔵^{ぞう}していた幾顆^{いくか}
の蜜柑を窓から投げて、わざわざ
踏切りまで見送りに来た弟たちの
労に報いたのである。

つづく

